

|         |                                 |
|---------|---------------------------------|
| 氏 名     | 成 田 博 保<br>なり た ひろ やす           |
| 学位の種類   | 医 学 博 士                         |
| 学位記番号   | 論 医 博 第 794 号                   |
| 学位授与の日付 | 昭 和 54 年 5 月 23 日               |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当         |
| 学位論文題目  | 小児各種疾患の病期別にみたリンパ球 Subpopulation |

論文調査委員 (主 査)  
教 授 太 藤 重 夫 教 授 濱 島 義 博 教 授 奥 田 六 郎

### 論 文 内 容 の 要 旨

小児において一般によくみられる各種疾患につき、病期別にリンパ球 Subpopulation の測定を行った。また健康児のリンパ球 Subpopulation を対照にして、患児の値とを比較検討した。T および B 細胞の測定は、マイクロプレート法を用いて、E および EAC ロゼット法によった。

1) 健康人の T・B 細胞百分率は、新生児期より成人までの間で大きな変化はみられず、T・B 細胞絶対数は、小児期で高値を示した。

2) 麻疹では、T 細胞百分率が発症後 4 週目迄で有意に低下していた。

風疹では、T 細胞百分率・絶対数が発症後 1 週以内で有意に低下していた。

手足口病では、発症後 1 週以内で T 細胞百分率が有意に低下、B 細胞百分率・絶対数が有意に上昇していた。

細菌感染症では、急性発熱期および解熱後 2 週以内の回復期において、T 細胞百分率が有意に低下、B 細胞百分率・絶対数が有意に上昇していた。

以上、上にあげた感染症では、ウィルス性・細菌性を問わず一般に急性期に T 細胞の低下・B 細胞の上昇がみられ、回復期には急性期に比べ T 細胞の上昇・B 細胞の低下の傾向がみられた。

3) 気管支喘息では、中等症・重症および血清 IgE 値の高い群で、有意の T 細胞百分率の低下・B 細胞百分率の上昇がみられた。また血清 IgE 値と T 細胞百分率との間に負の相関がみられた。

4) ネフローゼでは、増悪期・寛解期において T 細胞百分率が有意に低下しており、増悪期において B 細胞百分率が有意に上昇していた。しかしながら、ステロイド剤や免疫抑制剤がほとんど使用されていない時期では、T 細胞・B 細胞の有意の変化がみられなかった。それ故、本症にみられる T・B 細胞百分率の変化は、これらの薬剤の影響を無視しえないと思われた。

5) 上にあげた疾患における、T 細胞・B 細胞の変化の臨床的意義につき考察を加えた。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、小児各種疾患で病期別にリンパ球 subpopulation がいかに変動するかをみたものである。リンパ球測定はマイクロプレート使用、E と EAC ロゼット法によった。対照として新生児から成人までの年齢別の T・B 細胞百分率並びに絶対数を調べ各疾患患児のものと比較した。研究成績：(1)感染症はウイルス性や細菌性を問わず、一般に急性期に T 細胞の百分率の低下、B 細胞百分率の上昇がみられ、回復期には急性期に比し T 細胞の百分率上昇、B 細胞の百分率低下傾向が認められた。(2)気管支喘息では、中・重症及び血清 IgE 値の高い群で有意の T 細胞百分率の低下、B 細胞百分率の上昇がみられ、また血清 IgE 値と T 細胞百分率の間に負の相関がみられた。(3)ネフローゼでは増悪期、寛解期に T 細胞百分率の有意低下等をみたが、これらの変化は投与薬剤の影響によることを明らかにした。

以上の研究は、小児諸疾患時のリンパ球 subpopulation の病期による変動を明らかにしたもので、小児各種疾患時の生体反応の解明に寄与するところが大きい。

よって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。